様式Ｃ－１９

# 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年　5 月　17 日現在

機関番号：17601
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：21530954
研究課題名（和文）　音楽科教師の実践的力量形成に関する研究：演奏指導力を中心に

研究課題名（英文）　Research in cultivating practical competency of music teachers

研究代表者
菅　裕（SUGA HIROSHI）
宮崎大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：30272090

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は,演奏指導力を構成する諸能力の構造とその熟達プロセスについての分析に基づき，音楽科教員養成における演奏指導力養成カリキュラム開発のための基礎的知見を得ることにある。指導場面等の分析の結果，経験年数が比較的短い指導者を特徴付ける要素は「正確な演奏の追求」であることが明らかとなった。これに対し経験年数の長い指導者は，楽曲構造についての演奏者の全体的理解を促進し，それに基づく自発的・積極的表現姿勢を引き出すことを重視していた。

研究成果の概要（英文）：

The aim of this research was to get fundamental knowledge for developing the curriculum to train musical instruction ability in teacher training course through analysis of the structure of abilities for musical instruction and the process of mastering them. As the result of the analysis of some sessions of musical instruction, comparatively inexperienced instructors tended to emphasize precise performance, while experienced instructors emphasized performers' comprehension of a piece and tried to nurture their self-motivation and enthusiasm to express their understanding musically.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 2009 年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 2010 年度 | 600,000 | 180,000 | 780,000 |
| 2011 年度 | 100,000 | 30,000 | 130,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 1,200,000 | 360,000 | 1,560,000 |

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学、教科教育学
キーワード：各教科の教育、教員養成

## １．研究開始当初の背景

他者の演奏を診断し，そこから解決すべき課題を発見し，適切な指導方法を選択することは，音楽科教員を含む全ての音楽指導者にとって最も重要な能力である。

しかしながら現在の音楽科教員養成カリキュラムにおける音楽能力育成は，ピアノや声楽を中心とする実技学習とソルフェージュなどによる記譜･読譜トレーニングが中心であり，他者の演奏診断や演奏指導について学習する機会は少ない。演奏指導の基礎となる問題発見（error detection）の能力は，他の音楽的能力や音楽理論の学習とは独立して発達することが先行研究から示唆されており（Brand & Burnsed 1981; Crowe 1996; Van Oyen & Nierman 1998），演奏実技を中心とする現在の大学での学習だけで演奏指導力を高めていくことには限界がある。実際，教育実習に赴いた学生が，大学で専門的な声楽のレッスンを受講しているにもかかわらず，中学生の合唱を前にして，何をどのように指導してよいかわからずに戸惑ってしまう光景は決して珍しいことではない。演奏指導力の獲得は，教育現場に出てからの実践経験に依存しているのが実情である。
音楽教育の現場において要求される演奏指導力を準備するためのより効果的なカリキュラムの構築のために，まず演奏指導力の構造とその熟達プロセスについての基礎的な知見を得る必要がある。

## ２．研究の目的

本研究の目的は,演奏指導力を構成する諸能力の構造とその熟達プロセスについての分析に基づき，音楽科教員養成における演奏指導力養成カリキュラム開発のための基礎的知見を得ることにある。
具体的な課題は次の２点を明らかにすることであった。

①演奏指導の基礎となる演奏診断力の構造と熟達プロセス。
②熟練指導者による効果的な演奏指導方法の特徴。

## ３．研究の方法

研究方法は以下の通りである。

### １．演奏中の問題発見についての調査

①中学生または高校生による吹奏楽合奏または合唱の演奏場面を，前方から VTR に録画する。
②録画された VTR を,学生,経験の浅い教員,熟練教員，専門的音楽家に試聴させ，指導者の視点から修正すべき問題点について自由に発話させ，その内容を録音する。
③録音された発話の量および内容と音楽指導経験との関係について分析する。

### ２．演奏指導の方法についての調査

①次の演奏指導場面について VTR に録画する。
・教員養成大学音楽科教員によるピアノおよび声楽のレッスン。
・熟練指導者による中・高等学校吹奏楽部または合唱部の合奏・合唱指導。
②VTR に録画された演奏指導場面を次の観点から分析する。
・指導者が何についてどのような方法で指導を行っているか。
・修正の対象となる問題と選択される指導方法の間に関連はあるか。
③指導者に対し PAC 分析およびその結果に基づくインタビューを実施し，指導の背後にある指導者の音楽観や指導観の特徴と指導方法との関連について分析する。

## ４．研究成果

次の表は，4 名の吹奏楽指導者が指導中にどのような内容についての指導を行なっていたかについてその頻度を示したものである。

表６：各指導者の合奏中の指導内容に関するカテゴリー分析結果

| | 指導の内容 | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 音色・音質・アーティキュレーション | テンポ・リズムの正確さ | 音程の正確さ | 呼吸・息の流れ | バランス・ブレンド | 強弱表現 | 速度表現 | グルーピング・フレージング・構成 | 不明 | その他 | 指導枠数 |
| A | 6% | 37% | 13% | 0% | 3% | 14% | 3% | 8% | 12% | 8% | 141 |
| B | 26% | 48% | 0% | 9% | 35% | 39% | 0% | 13% | 17% | 0% | 25 |
| C | 3% | 50% | 11% | 3% | 11% | 8% | 5% | 0% | 3% | 16% | 83 |
| D | 48% | 15% | 0% | 13% | 2% | 40% | 8% | 42% | 2% | 4% | 59 |

4 名の指導者の合奏指導内容を比較すると経験年数の短い指導者 A，B，D の合奏練習では，テンポ・リズム及び音程の正確さについて取り上げる場面が全体の約 50～60％を占めているのに対し,熟練指導者 E の指導では,＜音色・音質・アーティキュレーション＞と＜グルーピング・フレージング・構成＞についての指導が中心で，さらに１つの指導枠の中で複数の課題について関連づけながら指導することが多かった。この結果は経験の浅い指導者ほど個々の音の音程やリズムの正確さに執着するのに対し，熟練した指導者ほどアーティキュレーションや全体的なサウンドに時間をかけ，複数の表層的な課題を関連づけて複合的に指導する傾向にあるとする先行研究の結果とも一致している。
演奏修正の方向性を示す「指示」「モデリング」「理論的説明」「メタファー」の４つの指導方法について比較してみると，指導者 A・B・D の場合，修正する対象とその方向性を直接言語的に伝える「指示」が中心となっている。これに対し，指導者 E はそれ以外の方法，特に「モデリング」と「理論的説明」の割合が非常に高い。

演奏診断，合奏指導分析，PAC 分析を通じて，経験年数が比較的短い指導者を特徴付ける要素として浮かび上がったのは「正確な演奏の追求」であった。彼らは演奏診断において，リズムや音程などの個々の音の不正確さを中心に指摘する傾向にあり，また合奏では，個々のリズムや音程の修正を目的として短いパッセージの繰り返し練習に重点を置いている。

これに対し経験年数の長い指導者は，楽曲構造についての総合的な音楽理解，つまり各部分の分節点や変化と対比の関係，緊張感の推移などについての演奏者の全体的理解を促進し，それに基づく自発的・積極的表現姿勢を引き出すことを重視している。

また経験の浅い指導者の指導場面では，＜指示＞が指導方法の中心となっていた。これは合奏指導における彼らの主要な関心が個々の音の「正確さ」に向けられているために，演奏を判定し修正方向を伝達することが指導者の役割の中心課題となりやすいためだと考えられる。これに対し熟練し指導者の場合には個々の音の正確さをターゲットとする指導は少なく，＜モデリング＞＜理論的説明＞＜メタファー＞＜質問＞など多様な方法で演奏者の楽曲理解をはかり，そこから演奏者自身の主体的な音楽表現を引き出すことが意図されていた。Tait (1992) は，「自分の役割を教えることに限定する教師は，単なる情報の伝達者，スキルの訓練者になり，その指導方法は限定され，柔軟さを欠く」のに対し，「自分の役割を進行役 (facilitator) と考えている教師は，個々の生徒の成長に資する環境を整え，その教え方は幅広く多様である」と述べている。この伝達者・判定者としての役割からファシリテーターとしての役割への指導者観の転換は，熟達化を特徴づける重要な要因として今後注目すべきであると考える。

またフルート・声楽・ピアノ・吹奏楽の熟練指導者の特に音楽表現に関する指導場面の分析からは，指導者によって指導の中で中心的にフォーカスされる表現コンポーネント，すなわち表現形成の根拠となる手がかりの選択に偏りがあり，そのことが指導者の指導スタイルと関連していること，また生徒側への表現に関する責任移譲の程度と指導スタイルにもまた関連性がみられることが浮かび上がってきた。

具体的に言えば，指導の中で演奏を通して喜びや悲しみなどの特定の感情イメージを聴手に対して与えることを意図する感情コンポーネント，あるいは人間やそれ以外の事物の運動との関連性によって演奏をコントロールすることを意図する運動コンポーネントにフォーカスしている指導者は，「適切な」あるいは「正しい」知識や技能を習得させることを重視していた。これらの指導者は，単純な指示・評価または近似値型隠喩的指導，すなわち「名状しがたい性質を持つ」声や音や身振りに対し，指導者が近似値的に接近を試み，語ることによってその意味を自らにも知らせながら，生徒側の了解を可能にするような隠喩的言語を用いて指導を行うことが多かった。これに対し，聴手に対し音楽的な構造を明示することを意図する生成規則コンポーネントにフォーカスする指導者は，生徒自身の楽曲理解に基づく主体的な表現を重視していた。これらの指導者の指導場面では，あえて別種の言葉かけによって生徒の中に認知的不協和を引き起こし，生徒の主体的な探究活動を喚起しようとする想像型隠喩的指導が比較的多い傾向が見られた。

先行研究から，合奏指揮者を含む大学時代の実技指導者の教授スタイルは，卒業後に生徒自身が教師になったときの教授スタイルに強い影響を与えていることがわかっている。例えば，学生時代のレッスンにおいてほとんど表現について自律的な選択の機会を与えられず，音楽的な表現は他者から与えられるものとして学習してきた学生と，わずかでも選択の機会を与えられ，音楽的な表現を自ら選び取っていくものとして学習した学生では，その後の演奏者としてのあるいは音楽教育者としての考え方に大きな違いが現れてくることは十分に考えられる。

平成 22 年学習指導要領における音楽科改訂の趣旨では，「思いや意図をもって」表現することや「音や音楽を知覚し，そのよさや特質を感じ取り，思考・判断する力」の育成が求められており，児童・生徒の自立した音楽的表現や主体的な音楽的な意志決定がこれまで以上に強調されている。しかし実際に小学校や中学校で行われている授業では，子どもが強弱や速度をやみくもに変化させるだけの学習や運指の習得だけに焦点化した器楽演奏，あるいは歌詞解釈だけを生徒に行わせ，具体的な演奏表現については教師の指示に従わせるのみの合唱が行われていることも多い。こうした授業の背景に演奏表現指導に関する教師の偏った考え方があり，さらに教師の音楽観や指導観に大学時代の実技学習経験が影響を与えているのであれば，これは音楽科教員養成を担う大学が検討すべき重要な課題であるといえる。

今回の研究からは，各指導者の演奏診断や合奏指導の様式が，楽曲に対するアプローチの方向性や指導者としての役割認識と深く関連していることが示唆された。実技を含む大学での学びの中で，演奏する楽曲の理解や習得の方法についてどのような指導が行われ，教員を目指す学生たちがそれをどのように受け止めているか，またそのことが教育実習などにおける彼ら自身の演奏指導スタイ

ルとどのように関係しているかについて調査する必要がある。
　今後，小・中・高等学校で行われている表現の工夫の授業についても調査を行い，教師の音楽観と授業スタイルとの関連について分析していくとともに，基礎的な研究の蓄積の上に，大学における演奏指導力開発のための実践的なプログラムの構築も視野に入れる必要があると考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①菅裕（2009）「経験年数の異なる 5 名の吹奏楽指導者の演奏指導方法と指導観の比較 」『音楽教育学』第 39 巻第 1 号, 13-24 頁。査読有り

②畑田麻由美・菅裕（2010）「音楽演奏活動における動機づけおよび心理的欲求」『中国四国教育学会教育学研究ジャーナル』第 6 号, 11-19 頁。査読有り

③菅裕（2010）「ファシリテーターとしての演奏指導者：経験年数の異なる吹奏楽指導者の指導スタイルの比較 」『季刊音楽文化の創造』第 55 巻，54-57 頁。査読無し

④菅裕（2012）「吹奏楽，独奏器楽，声楽指導における熟練指導者の音楽表現に関する指導方略」『宮崎大学教育文化学部附属教育実践総合センター』第 20 号，153－167 頁。査読無し

〔学会発表〕（計１件）
①菅裕「吹奏楽，独奏器楽，声楽指導における熟練指導者の指導方略」日本音楽教育学会第 42 回大会　2011 年 10 月 23 日。

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
菅　裕（SUGA HIROSHI）
宮崎大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：30272090

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：